

ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ

—ウサギの飼育の保育を通して—

鍋島 恵美¹⁾・高野 史朗¹⁾・光村智香子¹⁾

Experiencing a “Rabbit’s Story”

— A Case Study of Raising Rabbits in a Kindergarten Setting —

Emi NABESHIMA, Shiro TAKANO and Chikako MITSUMURA

抄 録：誕生して自分で餌を食べるようになったばかりのウサギ2羽を他園からもらって飼育する生活が9月から5歳児の子どもと共に始まった。育てる中で、そのウサギが子どもと共に暮らす仲間になっていった。2羽のウサギが雌と雄であることが分かり、別々に飼育サークルを作ったにもかかわらず、赤ちゃんが子どもの手の内で誕生するというできごとに遭遇した。その衝撃は、わたしたちの心を動かした。元気に育つにはどうすることがウサギにとっていいことなのか、書物や人からの情報を集めておとなも子どもも共に一生懸命に関わった。そのことが、“子ども劇場”と称して就学前に5歳児全員でする表現活動へとも繋がっていった。子どもが体を通してウサギを表現した。その表現は、リアリティに富んでいた。命をつなぐために、休園日には保育者の家から子どもの家へとウサギのホームステイが始まった。週末ごとに自宅に連れて帰る家族の中には、子ども以上におとなの方が愛着をもち父親の可愛がりように母親が目を細めて語る姿も見られた。5歳児の修了と共に誕生した子ウサギは1羽を幼稚園に残し好きな子どもの家庭へともらわれていった。親ウサギと1羽の子ウサギの飼育は、翌年度の5歳児に引き継がれた。そして、迎える親ウサギの死。ウサギの飼育にまつわる子どもとウサギの物語（ストーリー）が生まれた。そのなかで、①仲間関係が広がっていく過程②ウサギになって遊ぶ“わたし”と、ウサギを世話する“わたし”の多重性③ペットのウサギから仲間になっていく過程を実践から学んだ。

キーワード：ウサギ、いのち、つなぐ、飼育、子ども、おとな、ストーリー

I. はじめに

幼稚園では、飼育・栽培の実態が多く見られる。それは、幼稚園教育要領総則第1「環境を通して行う」ことを幼稚園教育の基本としており、直接体験の重要性と、その経験の積み重ねの中で物事を分かっていく過程を大事にするからである。しかし、現代の生活事情を鑑みると、都心ではマンション生活の子どもが多く、土に触れたり生き物と触れたりできる機会は減少している。清潔生活指向からか、生き物を家庭の中で育てるということも少なくなってきた。

1) 京都教育大学附属幼稚園

それ故に、園内ではできる限り飼育・栽培の経験を組み入れているが、鳥インフルエンザの流行やカメ騒動にみられるように、飼育することは難しい状況に強いられてきて久しい。本園では、1950年代から飼育活動は保育の中に取り入れられており、その当番は5歳児の仕事として位置付いている。仕事の内容は、飼育小屋を掃除して野菜を切って飼料に混ぜて与えることである。1990年代に当時の園長の専門から飼育小屋の改修を行い、ウサギとチャボとカメとが共存することができる環境になっている。地面は、水はけがよく掃除しやすいようにコンクリート仕様になると共に、食物連鎖を考えて飼育物の糞尿は隣接する畑に作られた堆肥小屋へと持ち込めるようになっている。そして、その肥料で畑の作物や栽培物を育てるのである。飼育栽培についてのこの考え方は教職員に今も引き継がれており、衛生管理には最大限の努力を払い、「掃除専用の長靴とマスクとスモックの着用、手洗いとうがいで対応する」ということから今も飼育環境を閉じることなくこどもとともに実践している。チャボの死（老衰）後は、保護者からウコッケイをいただいて飼育が継がれてきていたが、ウサギの病死（耳疥癬病）を迎えて以降2000年度からはウサギの飼育が途切れていた。

そこで、2007年度において、ウサギの飼育がこどもにとって有意義であること、5歳児担当の教師の飼育に関しての意思疎通も十分になされたこと、検討されたことからウサギの飼育再開に踏み切った。飼育とは、命をつなぐことであり、そこからこどももおとな（保育者・保護者）も貴い体験をすることになる。飼育の方法の伝授のみではない。日々飼育実践の中でさまざまに出会うであろう場面において、わたしはどう対処するのかをより深い感覚レベルで感情体験をすることにつながるであろうと考えている。さらに保育者や保護者の場合についても、感覚レベルでこどもと感情体験を共有することになるとも考えている。保護者の場合、日常的にこどもと接してはいる。しかし、それは養育する側、される側という関係であり垂直的な関係構図であると言える。ここでは「ともにウサギを飼育する」という視点でこどもと対座することが可能となる。例えば、ウサギが喜ぶように世話をするには、一緒によく相手を観る、好きな物を知るには食べぶりを観る、赤ちゃんに話しかけるような口調になっていることに気づくのではないだろうか。

以下、本稿では、ウサギの飼育を通してこども、保育者、保護者がともに生活を営んできたなかでの貴重な体験を、「ウサギ物語」として物語ってみたいと考える。

Ⅱ. 方 法

以上のような問題意識から、ここでは次のような方法で実践を振り返ることを試みた。すなわち、ウサギの飼育に関わったこども・保育者・保護者たちの有り様について、①ウサギとの出会いを時系列に沿ってエピソード記録を収集する②そのエピソードを幼稚園教育要領の5領域からみとる③さらに、こども・保育者・保護者が味わった感情体験がどのように行動や言葉に表れているのかという点から観ていくことである。このエピソードは、実践者が記録したものであり、前述した②③の観点がその中に埋め込まれている。観察者が記録するエピソードとは違い実践者の主観性が高いと考えるが、その点は、一緒に実践をしてきた保育者同士それらのエピソードを読み解き検討した。

観察期間	2007年9月～2008年3月, 2008年4月～
観察場所	2007年9月～12月 幼稚園の保育室棟耐震工事のため 隣接の中学校のプレハブ校舎の保育室及び幼稚園の園庭
	2007年12月～2008年3月 幼稚園園舎(工事完成)
	2008年4月～ 幼稚園

Ⅲ. 実践の経過

1学期終業式後、園舎保育室棟が耐震工事にかかった。園庭は使用できるものの保育室は隣接の中学校グラウンドに建つ2階建てのプレハブ校舎を使用することになった。引っ越しは、保育者で済ませた。そして、こどもも保育者も初めて迎えるプレハブ生活への、緊張感と楽しめとが交錯するなかで2学期の生活が始まった。園庭は使用できたので、飼育当番は園庭にある飼育小屋まで出かけて世話をした。新しく飼育を始めるウサギは、飼育小屋にはウコッケイが住んでいるのですぐには同居できず、互いの習性から無理と判断して、プレハブ園舎の空き教室を“ウサギ部屋”として使用することにした。

1. 子ウサギとの出会い・飼育する環境を作る・そして、ウサギの名付け

エピソード1-① 「昔 ウサギいたなあ…」 2007/09/07

2007年度第1学期を迎え動物当番(ウコッケイとカメの世話)が始まった。飼育小屋がより身近な場になったからか「昔はウサギもいたんやろ?」というこどもの声を耳にする。園としても一昨年からウサギの飼育の再開を考え始めていたことや、夏休みに入って、京都市立K幼稚園からウサギの赤ちゃん誕生のニュースが届いていたこともあり、こどもたちとウサギを飼うかどうかの相談をすることにした。こどもたちは、ウサギという言葉から「かわいい」「飼いたい」との声がすぐにあがった。しかし、世話をするのは自分(こども)たちであることから、具体的な世話の仕方等も伝えそれができかどうかとの話もした。その結果、「でも、飼いたい」「(世話は)できる」との返事で飼うことが決まった。その日から、ウサギが楽しく生活できる場をこどもたちと共に整えていくことになり、その仕事をしつつ「わたしニンジン持ってきてあげる」「男の子かな?女の子かな?」「ココちゃん(名前)がいい!」とやってくるウサギを心待ちにする姿が見られた。ウサギの世話をしたり、抱いたりなでたり一緒に遊んだりしながら、自分たちと同じ命あるものに愛情をもって大切に育てていきたいと保育者も願った。動物好きの副園長からは、人になつてくれるウサギになってほしいならば、子ウサギから人の手で育てていくことや、トイレトレーニングをしていくことの大事さを伝授してもらった。保育者の私たちもこどもと同じ思いで緊張感と期待感を持ってウサギとの出会いを心待ちにした。

エピソード1-② 子ウサギをもらいにK幼稚園へ 2007/09/07

K幼稚園までは登園から電車に乗って20分、さらに、下車して歩いて20分かかる。ウサギを連れて帰ってくるためには、入れ物があるため前日にこどもと一緒に「ウサギさんはこのくらい(の大きさ)かな?」「このくらいかも(自分の肩幅くらいの大きさを両手を広げて示す)」などと話しつつ、ちょうどいい加減の大きさの段ボールの箱を選んだ。その箱を持って5歳児総勢57名で出かけることにした。ナホは家からエサも持ってきている。きっと家庭に帰ってその話をしたのであろう。

K 幼稚園に到着して相手先の子どもたちと挨拶を交わして話を聞く間に手渡していた段ボールの箱の中に子ウサギを入れてもらうことにした。話がすんで K 幼稚園の先生が子ウサギの入った箱を持ってきて下さるやいなや、子どもたちは、我先にと子ウサギを見たい一心でその箱に向かった。その慌ただしい様子は、今まで世話をしてきた K 幼稚園の子どもが〈これは危ない!〉と感じて、子ウサギの入った箱をその子どもたちが触れないようにと私に手渡したほどだった。



その後、落ち着いて一人ずつ座って子ウサギを膝にのせてもらったり、K 幼稚園の子どもから抱っこさせてもらったりした。その時の子どもの表情は、さっきの騒然とした面持ちとは違い優しい笑顔になっていた。玄関の陰の場所に、ケージに入ったウサギが一羽いた。話を聞くと、子どもが抱いていて落とし、足をも骨折して動けなくなった子ウサギだと分かった。保育者がその話を聞く傍にカナヤリノがいた。顔を曇らせかわいそうだという表情になっていた。保育者が「そうか、気を付けないとだめなんだね。元気になってね」と、子どもやウサギに声をかけながらその場を後にした。座って抱くことの意味をこの子どもたちは実感として受け止めていたようだ。

帰り道、みんなで気を付けて連れて帰れるように、と二人ずつ交代しながらその箱を持つことを提案した。カナ・スズリはしっかり持ち、張り切って連れて帰ろうとする。ユキヤ・ナホは持ちにくそうに手を上下させながら「ななめにしたらあかん」と子ウサギを気にかけて歩く。次の人に「お願いします」と申し送りながら、みんなで園まで連れて帰った。

エピソード 2 ウサギ部屋をつくる 2007/09/10

園内で相談してプレハブ園舎の一部屋をもらい、大きなシートを敷いて子ウサギが自由に生活できるウサギ部屋を作ることにした。初日なので興味を持っている子どもが多く、たくさんの子どもの部屋に来た。そのため立って抱いたり、抱きたい一心でウサギを取り合ったり、抱っこしたいができない!といういざこざがあったりしたが、1時間くらいすると落ち着いてきた。ユリア・アカリ・カナ・ナホ・マオがゆっくり抱っこしたり様子を見たりしている。ユリアは自分では抱っこできずに「抱っこさせて!」と保育者に言い、友だちが抱いているのを代わってほしいと急がせた。ウサギを引っ張って抱こうとしたり、抱いて歩きまわったり、ウサギのおなかをギュッと締め付けたり…と自分の抱きたい気持ちが先行し、力加減までは気がまわらない様子に、思わず「そんなしたらおなかゲートてなるしあかん!」と保育者は止めてしまった。その様子を見ていたカナはその言葉を覚えていて、降園時にクラスのみんに「ウサギのお腹をぎゅっとしたらおなかゲートてなるしあかん!」と知らせていた。

ユリア「あれ?ここ硬いよ」アカリ「ドキドキしてる」と気づいたことを保育者に伝える。タオルに顔をつっこむ姿を見てカナ「見てー!」と可愛いという表情で喜んだり、友だちが耳を触るのを見てマオ「耳触ったら動くはずなのに動かないよ?」と不思議に思ったり、ケイスケは「パン食べてるで」と、それぞれに思ったこと感じたことを保育者に報告しにくる。

コウタは怖々、けれどニコニコ近づいて撫でようとする。子ウサギが動くたびびっくりして逃げるが、しばらくするとまたやってくる。ヒトキは子ウサギの行く先を追いながら口元にニンジンを持っていく。なかなか食べないが辛抱強く待っている。保育者が「T(保育者の名前)ウサギが食べちゃおっかな〜」と子ウサギに話しかけながら小さくなって食べようとする、その様子を見ようとヒトキもつられて小さく

なる。「ヒトキウサギも食べてみる？」と保育者が話しかけると、ヒトキ「や〜ん」と笑う。そこには和やかな雰囲気が漂っていた。私たちは、子ウサギのトイレトレーニングをしていた。トイレではない場所でおしっこをしたら、すぐに拭いてにおいが付かないようにしようと試みていた。そのことをこどもにも伝えていたので、こどももすぐに気づいて拭こうとするので、その部屋の隅におしっこ拭き用に古タオルを切って布を用意して置いた。

エピソード3 トンネルづくり 2007/09/10 (月)

ウサギ部屋に置いてあった段ボールと部屋の壁の隙間を子ウサギがぐぐって行く様子を一緒に見ていたカナに「そういえば段ボールの隙間からも出てくるよ、私も通れるくらいのトンネル作って一緒に遊ぼうかな？」と保育者から声をかけてみた。そこから、カナ「私も作る！」と段ボールを使ってトンネル作りが始まった。作ることがより楽しめるようにスズランテープ・リボン・ビニールテープ・綿テープ等も用意した。

カナは途中で人間も通れることを確かめながらリボンやスズランテープで飾って作っている。ヒトキが「戸をつける！」と家を作り始めたので、段ボールカッターも用意する。それを見て、抱っこしにきていたアユムも作り始める。アユムには作りたいイメージがあり、「ここは切らんとこ」と言葉に出しながら手を止めたり、切りすぎたところはテープを貼ったりして自分の思ったように作っていく。ヒトキとアユムが隣同士で作っていたため、アユム「ちょっと貸して」と相手の返事を待たずに綿テープを借りたり、ヒトキ「もう！」と返してもらったりする姿もある。タツヤ「何やっているの？僕もやる」ととんがり屋根の家を作ったり、マリが壁に絵を描いたり、といくつかのトンネルと家が建ち並んだ。ナナコは保育室で描いた絵をウサギ部屋の壁に貼って戻って行った。いつも一緒に遊ぶ仲間とは違う顔ぶれがここに来ていた。

エピソード4 ウサギの名前 募集ポストの設置 2007/09/10-11

子ウサギの名前を書いて投票するためのポストが桜組の保育室にできる。ミカ・ナホが朝から考えて投票している。リカ・ヨシカは画用紙を切って投票用紙を作る。子ウサギへの手紙も入っている！

梅組のこどもたちの目にも見えるように、と桜組・梅組の間の廊下にポストを移動した。タカオが自分の保育室からなくなっていることに気付き、「今日書きたいんやけど、どこ？」と尋ねにくる。同じく桜組のタクも「お手紙書いた」と保育者のところへ持ってくるので「お部屋出たところに引っ越したから入れておいで」と促す。思い思いの名前が、ポストに入れられた。その日に集まった名前は、みんなに分かるように、ポストが置いてある後ろの壁に貼っていった。誰一人として同じ名前がなくどの名前に決めるのが難しかった。名前を一つ選ぶことより、名前を考えてくれたことの喜びを、「先生もうれしいし、ウサギもきっと喜んでくれると思う」と伝えることにした。そして、単純に今までウサギの毛の色で呼んでいた《シロ》と《クロ》を正式な名前にするのを提案した。こどもたちもすんなり受け入れてくれた。

エピソード5 水飲み場や段ボールの壁ができる！ 2007/09/11

ウサギの家ができつつある頃、朝登園してくると、リノとカナがウサギがどうしているのか心配でT先生と一緒にウサギ部屋に入り糞尿の始末や部屋の掃き掃除をしてくれた。段ボール箱の家もでき、トイレトレーニングの便所をその隅に置き自由にその部屋の中で放しておいた。が、いたずらもし始めたので帰りは、ケージに入れておくことになった。この日の朝、ケージの中の掃除をまわりにいたりヨウヤ・カナ・アカリを誘ってやってみる。A市から転居してきたリョウヤは「Aにもいたよ。ふたつ、茶色と白。ヒマワリ(の種)が好きなんやで」と知っていることを教えてくれる。水飲み場がなかったので、新しく買っ

であったウォーターボトルの取り付けに挑戦する。リョウヤが張り切ってボトルに水を汲みに行き、保育者が頼んだ 200ml ぴったりに汲んできたので「ちゃんと言ったとこまで汲んできてくれたね、ありがとう！」と感謝する。リョウヤ自身もぴったり汲めたことに自信をもち、まわりの友だちに何度もそのことを口にして自慢げである。続けてユリアと一緒にもう一つの水入れにも水を汲みに行ってくれる。リノは家で飼っている犬も同じボトルで飲んでいることで興味をもち、ネジまわし役になって取り付けしてくれる。保育者と一緒に説明書を見ながら、リノ「あ～あ（ネジが反対!）」「え～！反対やった？」と奮闘する。ボトルの取り付けの位置もわからず、カナ「(上から)四つ目は？」わたし「あれ？高すぎた？」リョウヤ「三つ目がいいんちゃう？」など何度も付けたり外したりして奮闘する。その間もリョウヤは水持ち役でボトルを持ち続け、カナは「食べやすいように」とニンジン・キャベツを細かく手でちぎっている。ユリアは傍で子ウサギの様子を見ている。ああだこうだと迷いながらもいぶん時間がかかったがようやく付くと、みんなで「付いた～!!」と大満足だった。一方、ヒナミ・ユウコ・リノが段ボールで壁を作り、それを周囲に円く囲って家を作る。そこに思いがけず子ウサギが入ってくる。こどもも保育者も驚き、大喜びだった。

エピソード 6 新しい仲間（ユリカ）を誘う 2007/9/12

前日、磁石に違う種類の磁石やモールをくっつけて遊んでいたユリカ。一緒に遊んでいた他のこどもが歓声をあげる中で、くつつくのは「磁石やから」とサラリと答える姿からも、もっと柔らかい心で楽しんでほしいと感じていた。この日はウサギ部屋へ自らやってきたのでこのタイミングを逃さず一緒に掃除をしようとして誘ってみる。この日はマホが水替え、アカリがゴミ袋をもってくる、ユリカ・マホが糞敷き、モエカがえさ入れをする。マホは保育者にやり方を聞くとやる気まんまんできばきと動く。ユリカは「くさ～」と匂いを感じている。シンは子ウサギを抱っこし、ケンシロウは糞敷きを見ている。ユリカにはもう一つの水入れの水替えも任せてみる。最初は「こぼしてしまうし…」と立ったまま歩こうとしないが、少々こぼしても大丈夫！という気持ちで「マホちゃんも行かあったし、一緒に行っておいで！」と送り出すと進みだす。が、なかなか帰って来ないので「大丈夫かな？」と保育者も心配になり階段まで迎えに行くのと丁寧に運んでいる姿が見えたので、ウサギ部屋に戻って待っているとユリカ「できた～」とハリのある声で自信をもって帰ってくる。ケージに入れる前に保育者が「抱いたことある？」と尋ねるとユリカ「ない」とのこと「じゃあ抱っこしてみる？（子ウサギに）『今からユリカちゃんとこ行くよ、お水替えてくれはったよ、よかったなあ!』」とウサギの気持ちを代弁して膝に乗せた。ユリカ「(抱いて) ふわふわやなあ」「あれ？耳ってこんなに細かったっけ？」と実際に感じたことを伝えてくる。保育者も嬉しくなり、一緒に子ウサギをかわいがる。その傍らでは、次のようなことが起こっていた。タケルが子ウサギを追いかけているとおしっこが出てしまう。「みんなもドキドキしたらおしっこ出そうにならへん？お化け屋敷行ったらしたくなるでしょう？」と聞くとタケル「ならへん～」というが、傍にいたヒロトが「おなか痛くなる」と言ったので、その言葉を受けて「それと一緒にやなあ」と話しているうちにタケルも汚れたところを拭きはじめた。タケルはすぐには自分の行為を認めることはできずに言葉では否定していたが、ヒロトと保育者の語りを聞きつつ自分の行為からウサギが排尿してしまったことを認めていった。



2. ウサギとの遊び場を作る

ウサギ部屋に、飼育用にと思い段ボール箱や藁などを部屋の隅にたてて置いてあった。偶然にその間にウサギが入りくぐり抜けるという所を見たこどもの気づきから（エピソード3）段ボール箱を連結させトンネルづくりが始まった。保育者の「チカ子ウサギも入ってみようかな」と言う言葉かけからそのトンネルがウサギもこどもも通って遊ぶモノになった。ウサギが暮らすその空間で遊んでいる内に扉や壁の飾り付けができ家作りへと発展した。更に、それがウサギを遊ばせるための階段づくりやアスレチックづくりへとこどもの想像が広がっていく。

エピソード7 階段できる 2007/09/20-21

ウサギ部屋にできている長いトンネルに階段をつなげてウサギを上らせたいと考えたトシヤ、保育者もウサギになって遊んでいるこどももいろんなコースがあった方がおもしろいかも、と考え牛乳パックを準備した。トシヤが作っている様子をいろいろなこどもがおもしろそうだとのぞいていく。トシヤ「あー、テープ!」という声を聞いていたヒロトが「あー、ピンクでもいいの?」と応え、手伝うようになる。なんとなくできてくるとシロを連れてくる。牛乳パック2コを合体させて1段にして、ウサギをのぼらせようとしていた。が、階段の前で止まって引き返してしまう。カナが小さく切ったニンジンを一段毎に置いていくが上らない。トンネルから階段へと追い込むようにしても細い隙間から逃げていく。トシヤ「なんで上らへんのかなあ?」タカユキ「怖いとちゃう?」と話す。最後はおしりを押して上らせていた。すると、上りだけの階段だったことに気づいたりノやモエカなど部屋にいる女の子たちに「それじゃあ落ちちゃう」と言われ、トシヤも「ウサギの骨が折れちゃう」と気付き、ミカが手伝って上がって下りる階段ができた。トンネルから階段へウサギを追い込んで横穴をふさいでいくが、ウサギは上ってくれない。そこで、モエカが1段ずつニンジンを置くと、上まで上ってそのまま一気に下りていった。無理やり押し上げたような感じだったが、「クロちゃんおめでとう!」とみんな喜んで「シロちゃんも頑張れ!」と次には隅っこに隠れているシロを上らせようと狙っていた。帰るときに、トシヤに「階段どう?」と聞くと、「すべり台も作ったら少しすべったんやけど高い階段は上ってくれへん」と言っていたので見に行く。と段ボールの長い道の中に階段やすべり台ができていて、アスレチックのようなものもできていておもしろそうだった。また、シロとクロがスズランテープを口で引っ張る様子をカナ「おもちゃで遊んでる」、家の奥の壁から出ていくトリノ「あ、裏口から出て行ったよ」など、自分たちの生活と重ねて見ているこどもたち。段ボールでトンネルや階段・滑り台を作ってはウサギを楽しませてやろうと張り切っており、自分たちは「迷路や!」と喜んで通っている。ところが、ウサギはなかなか階段を上らないと、トシヤ「そうや、ドリームランドみたいにこうしたらいい」と階段の横をススキで飾ったりとやってみるが、ウサギは上らない。今は上ってほしい、滑ってほしい一心でおしりを押し上げたり抱いてのせたりしていると、それを「そんなことしたらかわいそうや」と止めるこどももいる。こども同士で相談しながら遊ぶ様子をしばらく見守りたい。

ウサギのシロとクロがやってきて3週間が経つ頃になると、タイガ「僕、一回も抱いてへんのに!」と怒ったり、触りたい一心でやみくもに手を伸ばしたり、といった当初のピリピリとした雰囲気や和らぎ、ウサギ部屋は穏やかな空間になってきた。シロとクロへの思いが“物珍しさ”から“仲間”へと変わってきているように感じる。大事に見守っていきたい。タケル「ふかふかや〜ここ骨がある!」ユリカ「耳ってこんなに細いんや〜」など本やテレビを通して思い描いていたウサギとは違い生きているウサギに直接触れることでなにかを感じ始めている。初めて抱っこした時はみんなそろって頬をゆるめている。仲良く

なれるようにとシロの前で同じように鼻をヒクヒクさせるアカリ、タク「おしり触ったらピンてした」と嬉しそうにウサギの真似をしてみせたりする姿も見られる。シロ・クロの表情や動きがウサギなりの表現なのだということに気づき始めたこどもたち、今度はどうして心を通じ合わせていくのか、楽しみにしたいと願う。自分とは違う相手への気づきや思いやる心は、友達との関わりにも通じるものがあると思うからだ。

エピソード 8 園庭にて 2007/09/13

こどもの活動が、プレハブ園舎だけでなく園庭へと向いていったときに、ウサギを留守番させるのがかわいそうだというこどもの声が出てきた。そこで、園庭に出かけるときには、ウサギも連れて出かけることにした。そして、段ボール箱を利用して作ったヒナミたちの壁とタツヤの家を使ってイチョウの木のまわりにウサギの家を建てた。

ナルミ・アズサ・マオ・コウタ・ヒロトが「入ってもいい?」「かわいい〜」と集まってくるとマオ「先生、お母さんになってくれる?」と、保育者をお母さんに見立ててウサギの家族ごっこが始まった。四つん這いになって散歩に出かけたり、ヒナミ「(甘えた声で)おなか空いたよう」とえさを食べるまねをしたり、撫でてもらうことを喜んだりしている。

また、少し日陰に場を変えたとリノ・ヒナミが抱っこを始める。3歳児のタケシも興味を持って柵の横に立っている。

エピソード 9 飼育小屋への引っ越しを考える 2007/09/26

ウコッケイと仲良くなれるように、と園庭での家を飼育小屋の横に引っ越してみた。その傍でタク・タカユキ・ユリア・カナコ・カナがなにやら相談をしている。「暑いんとちがう?」「じゃあ、イチョウの下(園庭中央に大樹がある)とかは?」「あかん、リレー(イチョウの木を中心にした円周がリレーのコースとなる)で踏んだら危ない!」ユリア「暑いから陰どうする?」タカユキ「ぼくはウサギ(ウコッケイから)守っとく」「あ、見て!ユリアちゃん、あんなんしてる」と、ウサギの仕草に目をとめたタカユキ。ユリアが振り向いたときには、ウサギのそのポーズは消えていたために自分で「足でこうやってんねん」と、仕草を真似て身振りで伝えている。そこで段ボールカッターを見つけたタカユキ「おうち作ろう!もっと広いおうちにしたげたらいいやん、ここまで(ウコッケイの柵の横)で、で、これ(ウコッケイの柵)取って、そしたら仲良くなれるやん」と作り始めようとしたところで片付けになる。

翌日の園庭で弁当を食べた日に再びチャレンジしてみた。ウコッケイもウサギに用心して動かず、首のみ前後に動かし威嚇している様子だった。ウサギも隅にいる。ウコッケイが動き出すやいなや、土管の穴の中に隠れた。共存して行くにはウサギの逃げ場所を用意することが必要だと気づいていった。飼育小屋での共存は、先住のウコッケイの生活環境を変えることやウサギにとっても不安定になることから、一緒に遊ばせても暮らすことまでは無理だとの判断から別々に飼うことにした。

3. “ウサギとの遊びの場を作る” その遊びの広がり

10月を迎えて、ハロウィン(お化けや魔女の遊び)ごっこや“こども運動会”の表現活動や運動的な遊びが4歳児からの経験もあり盛んになる。

毎日登園後保育者と共にリノとカナとが、ウサギ部屋に行き世話をすることが日常的になってきた。そして、そこに遊びに来るこどもも巻き込んで世話をしてからウサギ部屋の遊びが始まった。両クラスの保育室やプレールームには、魔女やコウモリやドラキュラの住み家ができ、

そこからウサギ部屋にも脅しに来るようになり、ウサギを守ろうと抱いて隠れることから、こども自身がウサギのお化けに変身して対抗するようになる。そのことは、ウサギを世話したりウサギとかかわったりすることで居場所を見つけていたこどもも積極的にその遊びの中に入っていきかけとなった。レストランや病院ごっこをこのウサギ部屋で展開しているこのこどもたちは、“ウサギの～”と命名することで自分たちの遊び空間（居場所）をもとうとしているように感じる。その逆に、ウサギ部屋に関心の薄かったこどもも、ハロウィンごっこを通しての遊びからこの部屋に出入りし始めウサギと親しみ始めた。

エピソード 10 ウサギが食べられる！？ 2007/10/01

ウサギと遊ぼうとウサギ部屋へ向かうカナコ・リノ。保育者は、途中の桜組保育室や廊下にいる“おばけ”たちをワクワクしたような表情で見ながら歩き、時々「おばけだぞ～」と脅かしてくる“おばけ”から「キャ～！」と逃げたり3人でギョッとかたまったりすることも楽しんでた。ウサギの部屋へ入ると中ではリカ・ミカ・ヨシカ・タケルがシロとクロをトンネルに入れたり抱いたりして遊んでいた。すると、シロとクロの姿を見たリノが「おばけがウサギ食べにくるかも！どうしよう！！」と心配しはじめる。違う遊びをしているこどもたちから「もうすぐおばけ来るで！」との情報が入るたびに段ボールの囲いの中にシロとクロを抱っこして隠れている。おばけたちの姿を見てリノ「そうや、私たちもあれ（怖い面）つけてウサギのおばけになったらいいやん！」と食べられないようなアイデアを出す。面作りの材料がそろう



とマジックで思い思いの面を描いていく。“おばけ”のような面ができるのかと思うとウサギの面ができていった。カナコ「見て、この目怖いで」保育者「ほんまや、三角の目で怖そう～」カナコ「笑ってる口も描いとこ」保育者「うわ！その口がまた怖いなあ」、リノ「見てー、口ギザギザにした」保育者「歯がとんがってて怖そう～」とどれだけ怖いウサギの面にするか考えて作り、尻にはまん丸のしっぽを作って着けている。カナコは「こうしといた」と画用紙に怖そうなウサギの絵と『おばけやしき』と書いた貼り紙をドアに貼り付けた。

エピソード 11 -① ウサギの病院 2007/10 下旬

ウサギ部屋に置いていた画用紙やマジック・ビニールテープ・スズランテープなど（面作り・しっぽ作りの材料）を使って薬を作り始めたヒナミ・マホ・ユウコ・モエカ・ナルミたちが、ウサギ部屋で使っていた段ボールの壁や個人イスを丸く並べ変えて病院を作り、病院ごっこが始まる。喜んでウサギを抱っこして病院へ行くが、診察を受けるのはウサギではなく人間！？

数日続いたが、患者がいなくなり病院はなくなっていった。

エピソード 11 -② ウサギのレストラン 2007/11/05

コモモリに食べてもらおうとカボチャを作っているカナコ・マヒロ、ごちそうを作っているマリ・マオ。ゆっくり食べてもらえるようにと保育者も一緒に机を運び、イスを並べたりテーブルクロスを敷いたりしながら場を整えていった。そこへリノ・アユミ・ナルミ・ユリアもやってくる。それぞれが思い思いに



ごちそうを作ったりウェイトレスになったりしている。マオが画用紙に“うさぎのレストラン”と書き、廊下の壁に貼っている。

エピソード 11 - ③ 宅急便です！ 2007/11/06 (火)

コウモリに変身しているミカが「カボチャできた？」とウサギのレストランの様子をうかがいにやってくる。ウェイトレスのナルミが椅子に案内したり注文を聞いたり、と張り切って対応している。ごちそうを食べたミカは「私たちもパーティーしてるのでよかったらどうぞ」と言って桜組保育室へ飛んで帰っていく。

しばらくするとケンシロウから「魔女のパーティーから宅急便です！」と黒いものが届く。保育者「ありがとうございます、なんですか？」と尋ねるとケンシロウ「コウモリの皮です！」と笑って答えると再び飛んで帰る。早速料理してもらいいただくことにする。そのやりとりを見ていたタク・アズサもおもしろそうだったのか、コウモリ料理を食べにくる。

(1) 元の保育室に引っ越して

耐震工事も終了して 12 月に入って元の園舎に引っ越すことになる。今回はこどもと共にその準備にとりかかった。ウサギの部屋を大掃除し、引っ越し準備が一足先にウサギ好きのこどもたちで完了した。カナ「こんながんばったし、また“よくがんばったな”って手紙が来るかもしれない」と、4 歳児の経験からつぶやいた。そこで、カナの言葉には応えてやろう考え、次の保育計画にある歌「うさぎ野原のクリスマス」の楽譜をその手紙に託した。翌日「よくがんばったな」と書いた魔女からの手紙を届けることにした。こどもたちは「手紙が来た！」と、興奮して仲間知らせ、おそろおそろ開封した。この種の手紙には「白い煙が出てくるかもしれない」という疑惑が以前からあって開けるのには慎重だった。

エピソード 12 - ① うさぎ野原のクリスマス♪ 2007/12 中旬



11 月 28 日親子音楽鑑賞会を経験したことから保育室では“手作り楽器と歌の演奏会”の遊びが展開していった。その曲目に「うさぎ野原のクリスマス（作詞：新沢としひこ，作曲：中川ひろたか）」もあがり、こどもたちの大好きな曲になっていった。ミカは歌いながら、感じたままに体を動かし楽しんでいる。その歌詞の中にサンタへのプレゼントをお願いする言葉があり、サンタへの手紙を書いた時には、自分たちのお願いと共に『ほうしをください ころ』『てぶくろが

ほしいです しろ』など歌のイメージと重ねながらシロとクロからの手紙を代筆する姿も見られた。

こどもたちにサンタのプレゼントが届いた朝、シロとクロにも帽子と手袋が届いた。こどもたちは喜んで帽子をかぶせたり手袋をはめたりしているが、シロとクロはすぐにとってしまう。リノ「もう、すぐ取ってしまうねん」と困りながらも、諦めずに何度もかぶせたりはめたりしている。人形の靴下まで履かせていた。



エピソード 12 - ② 家族ごっこ ウサギの存在に変化 2007/12 中旬

プレハブ園舎から耐震工事を終えた園舎へ引っ越しが済み、桜組の保育室前テラスに新しくウサギの家ができた。自分たちがウサギになるのではなく、ウサギを自分たちの家族の一員として家族ごっこを始めている。野菜をハサミで小さく切って小皿に盛り「はい、ご飯ですよ」と食べさせたり、食器棚をベッドに見立てその中で寝かせたり、抱っこして可愛がったり、とプレハブ園舎での遊びとは少し違ってきている。

プレハブ園舎から元の保育室に戻ったことは、ウサギ部屋の中に遊びに来ていたことから自分たちの遊びの中にウサギをつれて遊ぶという関係性の変化につながったように感じる。それは、ウサギを飼育する場所が一つの部屋からテラスの一角に代わったこと、狭くなったことが大きな要因と感じている。一方、保育計画の中で取り上げた「うさぎ野原のクリスマス」は、「ウサギノハラ ノ コウサギたちハ・・・♪♪」と子ウサギが主人公になった歌詞であることから、歌いながらこどもの身近に暮らす現実のウサギに思いを重ねてサンタへのお願いを書いたと考えられる。リズムカルにうきうきとみんなで歌う経験から、ウサギへの思いをみんなが寄せることにもつながっていった。その全体経験を更につなぎたく、保育計画にあった園外保育の行き先をウサギをもらったK幼稚園とその近くの鴨川の散策とした。「クロとシロのお父さん、お母さん、兄弟に会いに出かけようか」ともちかけた。ウサギの家族のつながりを通して他園のこどもとのつながりやこどもの家族へのつながりを育むことを願った。



保護者向けに毎週おたよりを発行している。その中でウサギとこどもとの関わりを伝えていた。ウサギの情報がこどもから家庭へ、家族から家族へと伝わり保護者の中にも休日にウサギを世話したいとの申し出も始れていた。このことからホームステイを提案した。年越しや新年をこどもの家で迎えるので、今まで世話をしてきた保育者は、ペット用品からシャンプーやペットフードを付けてその家庭に世話を引き継いだ。私たち人間と同じようにしてほしいとの願いからだった。家庭の中で、ウサギを親子でシャンプーしている様子を思い浮かべつつその親子の感情体験の貴重さを願った。クリスマスプレゼントをこどももウサギももらうなど、家庭でもこどもの生活とウサギの生活が重なり始めた。保育者の願いが、少しずつ家庭にも伝わりつつある様子がうかがえる。

ウサギの里帰り 保護者へのおたより (2007/12/20 付) より

天気もよく、シロとクロをもらいに出かけたときと同じように、一羽ずつ入れる入れ物を作って連れてK幼稚園へのウサギの里帰りとその近隣の鴨川探検に出かけることができました。9月とは違い、ウサギを入れる箱の大きさも一回り大きい物を用意したり、こどもがふたりで協力して運ぶのにも「重い」と感じる体重にシロもクロもなっていたりしました。しかし、こどもも9月から比べると頼もしく成長しています。誰も連れて行きたい一心で意欲に燃えていました。K幼稚園に到着し遊戯室の真ん中にシロとクロの箱を置くとK幼稚園の友だちがドッと駆け寄りサッと抱き上げ、久しぶり

の再会を心から喜んでいます。自分たち以外にもシロとクロのことを大事に思っている人がいたことを改めて知り、こどもたちは、何だか不思議そうにその様子を見ていました。みんなでひとつの輪になり一緒に「♪うさぎ野原のクリスマス」を歌うと、真ん中のシロとクロがピンと耳を立てて立ち上がり、箱から顔をのぞかせます。その姿を見ると思わずニコニコ…、みんなの優しい気持ちがつながった心地よいひとときでした。



エピソード 13 冬休みウサギのホームステイ 2007/12/21 ~ 2008/01/10

休みの間も教職員だけでなくみんなで世話していきたい、より親しみがもてるよう、また少しの間でも家で動物を飼う経験ができるようにと、ホームステイ先を募ることにする。

広い庭を走らせてもらったり、クリスマスのプレゼントが届いたり、いっぱい抱っこしてもらったり、とそれぞれの家庭でシロもクロも可愛がってもらう。シンの母「父親が猫で声でシロに話しかける姿がおかしくて…」、リカ「妹がギュッとするから逃げる」などの話も聞かせてもらう。家族での微笑ましい時間が流れていたことを嬉しく思う。家族からの思わぬ家庭での有り様を聞くことができ、これも一つの育児支援ではないかと感じた。

長く預かってくれることになったシンの家庭では、こどもと同じようにクリスマスイブの日にウサギにもプレゼントを用意してもらっていた。

(2) 砂場の穴掘りーこどもとウサギの協働ー

ウサギの成長と共に性別が判断できる頃になってきたことや、ウサギが増えた時の飼育の困難さについてこどもに「赤ちゃんが生まれないようにクロを医者に連れて行って手術をしてもらおうか」と相談した。しかし、この提案はこどもに受け入れられず、交尾しない工夫や生まれた後のことを考え出した。そのことが1冊の本を観て調べるという行為につながった。今までは、触れあひながら体感してきたことを書物という媒体を通して実物のウサギと記述されていることを確かめ始めた。ウサギの仕草の意味づけをすることでウサギの思いを理解しようと始めた。手術をしない代わりに、みんなで子ウサギが生まれないように気配りをしようとする姿がこどもの中にも芽生えてきた。新たなウサギと暮らしていく状況が生まれ、大事な命をつなぐことになる意味をこどもから教えてもらった。

エピソード 14 絵本『ウサギ』をみてーウサギの視点に立とうとするー 2008/01 中旬

プレハブ園舎の広いウサギ部屋とは変わり、なかなか自由に走り回ることのできないテラスのウサギの家。遊びの中でこどもたちのウサギとのかかわり方が少し人間本位になってきているように思えたことやクロが雄でシロが雌と分かり、シロとクロを一緒に遊ばせるには去勢手術が必要（誕生後の飼育が困難なこと）かもしれないことなど、保育者自身もこどもと一緒にもう一度ウサギのことを知りたくなる。近郊の獣医に電話相談したが、去勢手術はしていないとの返事だった。そこで絵本『ウサギ（しぜん キンダーブック 4月号）』をみんなで見ながらシロやクロの様子を振り返ったり、これからのことを考えたりする

機会をもった。本のお話を聞きながら「クロと一緒にや！こんなんするもん」と顔を洗う仕草を体で真似てみせたり、布をひっかくのは「土を掘りたかったんとちゃう？」とウサギの気持ちに寄り添ったりしている。保育者「仲良しやから一緒に遊ばせてあげたいのやけど、赤ちゃんがいっぱい生まれたらお家もないし困るでしょう？」と手術の相談をすると、「痛いしかわいそうや！」「(様子を)見ててひっついたらサッと離れたらいい」「赤ちゃん 60 匹生まれたらみんな 1 匹ずつもらって帰ったらいい」とシロを気遣うことも多かった。

後日、カナ・リノ・ミカ・ナホ・ミサキ・ヨシカ・リカ・トシヤ・シン・アカリ・スズリ・ユリアたちは「土を掘れるように」とテラスから園庭へとウサギの家を引っ越し、逃げないように家を作ったり、側に台所を作って自分たちのごちそうを作ったり、家から砂場へ出かけてはまた帰ってきたり、ウサギの家を基地にそれぞれの遊びが始まっていった。また、シロとクロを家に残したまま 2 階へ帰ってきてしまい、テラスから 2 羽がひっついてのを見つけ「大変！大変！」とこどもたちも一緒に大急ぎで階段を駆け下りたこともあった。

エピソード 15 - ① 砂場へ！ 2008/01/25

自分たちが穴を掘って遊ぶ砂場へ、もっといっぱい穴が掘れるようにとシロとクロを連れていく。ウサギの力を借りようとしたらしい。そのころ砂場にはタクヤ・ケンタ・ケイタ・ハヤトが作った水路（水は入っていない）ができていた。その水路にシロとクロを放し、トシヤは飛び越えないようにともっと深い穴を掘り始める。自分の掘った穴にシロが入ってくると嬉しそうに中を覗いている。シロが入りやすいようにシロと穴との大きさのバランスを考えながらトシヤ「こんなくらいでいいねん」と自分で納得している。リカ・リノ・ヨシカ・スズリはシロとクロが遊べるようにと道や山を作り、その横でコウタも山を作り始める。クロが自分たちの道に沿って歩いてくれるのが嬉しく、自分たちでも歩いてみせる。時々道の続きをウサギが前足や口先で掘るのを見てスズリ「今ここ掘ってたで！」と喜んで友だちに報告、その瞬間を見ようと集まってくるこどもたち。けれど、途中でウサギが道から出ようとするので大急ぎで出られないように体でガードしたり、逃げていったときには「あかんやん！」とみんなで追いかけて捕まえてはまた道に戻したりもしている。



就学前に生活を基盤に好きな絵本のストーリーと自分たちのお話のストーリーを重ねつつ創り上げていく“こども劇場”への遊びが展開している時である。仲間と協同で考え合うときと好きな遊びで存分に遊ぶときとこどもの生活も多面的になってくる。ウサギと出会った当初は、ウサギを遊ばせるための階段作りだったのが、砂場でのコース作りの遊びは、自分たちの遊びにウサギが参加してきたという対等な“仲間”としての感覚をこどもは抱き始める。

エピソード 15 - ② ウサギのコース .1 こども劇場に向かって 2008/01/30

ケイタがウサギのコースを作っているところへスズリが入り、ふたりでコースを作っている。シロとクロはウサギの家にいる。ヤスオがコースの中の山をポケモンの島に見立てて平らに作り直したり、タクヤ

の“機関車 1414”に乗って“魔女の宝石”を狙いにいたりしている。別の機関車に乗った“新聞屋ケンタ”が時々ニュースを知らせて砂場へやってくる。“こども劇場”に向かい自分の好きなものになってそのイメージで遊んでいたりと、現実の自分の好きなことで遊んでいたりと多重な遊びが展開される。

エピソード 15 - ③ ウサギのコース 2 2008/01/31

リノ・アカリ・ケイタがウサギのコースへシロを連れてくる。

ケイタはシロと一緒にコースを掘る姿を初めて見て、ケイタ「わあ～、かわいい～♥」と感嘆の声。ケイタ「シロにここ掘って、って頼んだら掘ってくれるんちゃう？」と嬉しそうに保育者に話す。



エピソード 15 - ④ 追いかけてっから 保育者のウサギの代弁 2008/02/04

園庭のウサギの家がポケモン(警察)の追いかけてっこの基地となる。追いかけてっこがひと段落し、タカユキ・ユウダイ・ケンシロウ・ショウ・ミサキ・アカリ・ユリア・スズリ・ユリカ・保育者がウサギの家で休憩していると、ちょうどクロが土を掘り始める。その姿をみて保育者「じゃあ、行ってきます！」とクロと穴掘りに出かけようとする、「行くー！」と何人かも腰を上げ砂場へ向かう。ケンシロウ・ショウ・アカリ・カナが道を作り、ミサキがトンネルを掘り、スズリがせっせと穴を掘っては橋を通したり、ヨシカがみんなが掘った土を運んでは山や横穴を作ったり、ユリアが様子を見ながら何か手伝おうとしていたり…と協力態勢を取りながらコース作りを進めている。



エピソード 15 - ⑤ 穴掘りに行こう！おとなしいこどもの積極性 2008/02/05

ヨシカが登園後一番に保育者の隣へ来て「穴掘りに行こう！」としっかりした口調で誘う。こんな“やる気”なヨシカをみるのは初めて！嬉しくなる。前日のミカ・ヨシカ・ユリアに加え、ウサギの好きなリカ・リノ・モエカ・ナルミ・タツヤ・トシヤ・マホ・ヒナミや、山作りや穴掘りが好きなコウタ・タクヤでも入ってくる。この日もシロとクロがコースを歩きまわ中、掘り続ける人と運ぶ人(リカ・マホ・ヒナミ・ナルミ)に分かれて作っている。ままごとの場所の取り合いでトラブルになりやすかったリカとリノと一緒に力を合わせて作っていたり、ひとりで作るが多かったコウタが友だちと同じ目的をもって遊びに参加したりする姿をみて嬉しくなる。ヨシカは穴掘りの休憩中にはシロと一緒にウサギの家に帰り、抱っこしたり撫でたりして家の中で一緒に過ごす。



エピソード 15 - ⑥ 代わる代わる… 2008/02/08

毎日複雑に変わってゆく砂場の様子や友だちや保育者が楽しそうにしている姿に刺激を受けたのか、ケイスケ・ユキヤ・フミオ・コウキ・ハルトと、珍しいメンバーが道作りに入ってくる。タク・トシヤ・スズリ・ユリアも引き続き掘っている。ケイスケはスズリと一緒にどこを掘るのか相談したり、掘っているところへクロが来るとケイスケ「またケイちゃんとか来た」と笑って(うれしそうに)



手を止めクロの様子をうかがったりしている。ユキヤはトシヤの穴にシロがよく入ることに気づき不思議そうに穴を覗いて、トシヤになにやら声をかけながら手伝おうとしている。ハルトもまわりの様子を見ながら、「ほく運ぶわ！これにいれて！」と手押し車を持ってくる。友だち遊びがうまく繋がらないフミオ・遊びたいけれど思いやテンボがずれるコウキは見よう見まねで穴掘りを楽しんでいる。“こども劇場”へ向かう生活で、なかなか友だちと関係をつなぐことが難しかったり、消極的だったこども同士がウサギを核にして集団の楽しみなかに一緒に入り込むようになる。



4. ウサギの出産と死のなかで

エピソード 16 ウサギの家で弁当を…ウサギのこどもとウサギ 2008/02/12

こども劇場へ向けての生活の中で、自分たちのなりたいもので場を作り、弁当を食べることになる。ウサギになりたいリノ・カナ・マホ・ナルミとナナコ・カナコ・エマ・スズリがウサギの家へやってくるが、2グループに分かれて食べる場を作り始める。保育者「ウサギの家はひとつなのでこちらへどうぞ」とナナコたちに声をかけると「だって狭いし入るとこない」とのこと。リノたちにも入れるよう考えてもらおうと、向かい合わせで食べられるよう場をあけてくれる。4人ずつ向かい合って食べる。カナ「シロとクロも連れてきていい？」とのことから、シロとクロの家作りも始まる。

エピソード 17-① こどもの手の中で誕生 2008/02/14

いつものように朝の世話を終え、ヨシカ・リノがシロとクロを遊戯室のウサギの家へ連れて下りる。トイレや餌も下ろして家を整えながら、クロが近づいてくるシロに「ぶっ！」と声を出し、怒ったように引かく様子が目に入る。普段と違う姿に保育者「なんか怒ってるね」と不思議に思い、保育者「そんな怒らんでもいいの」とクロをなだめるように声をかけ、ヨシカ・リノと顔を見合わせる。



ヨシカ「抱っこしていい？」保育者「いいよ」とクロを抱っこし、リノも隣でその様子を見ている。クロがヨシカの腕の中で動き、おなかを上にしてひっくり返るとヨシカが大きな声で「先生！クロにおちんちんがある！」と叫ぶ。リノも驚いた顔。保育者も「えっ！？（クロってほんまは男の子やったん！？まさかそんなはず…）」と驚いてクロのおなかを見ると、たしかに陰から棒のようなものがちらっと出ている。保育者「えっっ！？」とよく見ようとすると、突然ニョキーッと勢いよくその棒が伸び、棒の先に指らしきものが付いている。保育者「赤ちゃんやっ！」。ヨシカも目をまるまるさせている。保育者「ヨシカちゃん、そっつと下ろそか…」と驚いてクロを下におろす。保育者「エミ先生呼んできてー！！わらも持ってきてー！」と周りのこどもたちを伝令に出す。

その間に1羽生まれる。ヨシカ・リノの顔が興奮(きっと私もそうだったろう…)している。エミ先生「まだおなかにはいるはずだから！」と段ボールで小さな母屋を作り、屋根を付け、暗くてそっとできる環境を整える。たくさんのこどもたちが周りを囲み「ちっちゃいなあ！」、タケル「ねずみかと思った…」「耳はまだ短いんやなあ」「(心配そうに)目が開いてないで」保育者「人間の赤ちゃんも生まれた時、目は見え

ないんやで」「ふ〜ん」、リカ「あ、ちんちんあるし男の子や！」保育者「それ、たぶんへその緒違うかなあ？」「(残念そうに)一緒に遊べるのは僕らが小学校行ってからやなあ、だって大人になるまで3



か月かかるんやろ？」など初めて見る(私も!)生まれたての赤ちゃんに興味津々で口々に話す、声を小さくするよう促す。一方、自分の毛をむしるクロをじっと見つめアカリ「痛いなあ…」と気持ちを代弁したり、血のついたお腹を見てリカ「うちのお母さんも赤ちゃん産んだ時血ついてたで」と自分のお母さんと同じだと気づき周りのこどもたちに教えてくれたり、と赤ちゃんを産み、守るためのクロの姿に心を寄せるこどももいた。出産準備を整え遊戯室を出る。先に生まれた1羽は触らずそのままにしておくことにし、クロに任せるが心配。

ひと段落してほっとするとヨシカ・リノと顔を見合わせ3人で「びっくりしたなあ、びっくりしたなあ」「うん、うん」と興奮を分かち合った。



『うさぎのあかちゃんがいま。しずかにしてください』と紙に文字と絵を描き、遊戯室のドアに貼っておこうとする。一緒に見ていたリノが「“くろより”って書いた方がいいんちゃう？」と提案、リカ「あ、そうやな!“くろより”」と書き加える。

保育室ではカナたちがたくさんキャベツをハサミで細かく切り、丸い台にのせたおいしそうな“おめでとう”のケーキができあがり、母屋の傍にそっと置かれた。シロも自分の赤ちゃんが見たいだろうと、ケージごとクロのいる遊戯室に引っ越した。

エピソード17-② お見舞いに… 2008/02/15

翌朝、登園するとその足で遊戯室へ向かうリノ。リノ「お見舞いの花束、作ってきた」と折り紙で作った花束を渡してくれる。クロに見えるよう、柵の入口付近に飾る。ヨシカも朝出会ったときから「抱っこしてたら生まれたなあ！」としっかりした口調で、思い出しては嬉しそうに話す。



ミカ「あの子、どうなった？」と最初に生まれた赤ちゃんの話が出てくると保育者「うん、やっぱり寒くてあかんかったみたい…」

と亡骸を見せる。こどもたちと一緒に動物たちの慰霊碑の元に埋めに行く。途中、さみしくないようにきれいな花と一緒に埋めてやりたいことを伝えるとナルミ「探してくる！」と2階へ走っていき、ピンクのサクラソウを少し切ってきて持ってくる。何種類かの草花と固形のえさを箱に入れてやる。「天国に僕のおばあちゃんいるし大丈夫やで」と安心させてやる姿もある。

この日の“こども劇場”でウサギになりきったこどもたちが急に「キュ〜、キュ〜」と高い声で鳴き出し、

あちらこちらで出産前の興奮の表現が出てくる。どうしたのか尋ねると「赤ちゃんが生まれる」とのこと。「コマの魔法使い」のこどもたちに温かくするための魔法をかけてもらい、大きな布団の上で無事赤ちゃんが生まれる。赤ちゃんになったウサギのこどもたちはおっぱいを求めて母ウサギ（保育者）の元へと帰っていった。一方、現実のウサギがどれだけ生まれたか？ちゃんと生きているか？まだはっきりわからず心配。

エピソード17-③ トシヤの布団 2008/02/18

登園後、母と共にトシヤが遊戯室へやってきて、赤ちゃんのための手編みの布団を見せてくれる。トシヤ「土曜日と日曜日とずっとしてん、しんどかったわ！」と疲れたような、照れくさいような顔。本当は母屋に敷いてやりたいと思っていたようだが、生まれたばかりの赤ちゃんに人間の匂いがつくとクロが赤ちゃんを育てなくなってしまうかもしれないことを伝えると、クロが持って行ってくれることを期待しながら、ぼんっと柵の端っこに入れる。



今日の“こども劇場”ではタイガが男児でたったひとりウサギになる。喜んで遊ぶが、出産の場面になるとステージの上へ戻り恥ずかしそうに座っている。

保育者「お父さん、しっかり見守っててくださいね！」と声をかけるとうなずいて見ている。

エピソード17-④ ユリアのマフラー 2008/02/19（火）

トシヤの布団を見て何か思ったことがあったのか、この日はユリアが母と共に遊戯室へやってきて手編みのマフラーを赤ちゃんに、と持ってくる。言葉はあまり出てこないが、自分ができることで何かしてあげたいと思ったのだろうか？

最初の1羽を除き、残りの6羽が全て元気に生きていることがわかり、ひと安心。

エピソード18 いつも通りに… 2008/02/20（水）

“こども劇場”当日、開演前だがリノ・カナ・トシヤはきちんとウサギの世話をしに行く。

ウサギのくに おたより（2008/02/22付）より

男の子ウサギが仲間に入ってきました。楽しみでした。こども運動会で作った魔女のぼうしにウサギの耳を付けることを提案しました。6色の中から好きな色を選んで好きな大きさの耳にしました。耳の位置や向きも一人一人こどもの思いがありました。「赤ちゃんやし、下向きに付けたい」「長い耳がいい」「チカコ先生と一緒にがいい」…チカコ先生の名前が出てくるのは、シロとクロがやってきたその日からずっと一緒に世話をしてきたこどもだからだと感じました。赤ちゃんウサギを気遣い、身近に自分たちの家も作り可愛く飾りを次々と作っていきました。



エピソード19 見守る心-自制心-

2008/02 下旬～03 月上旬

登園後、ヨシカ・リノ・ミカ・リカ・ユリア・トシヤたちは赤ちゃんが大丈夫かどうか心かけ、遊戯室へやってくるまで重なって母屋に



隠れたり、クロの下にもぐっておっぱいを探したり、間違えてシロのおっぱいをもらいにいたりする姿を柵の上から「かわいい〜」とうっとり頭を並べて見ている。その姿もまたかわいい。まだ赤ちゃんだから、と早く抱っこしたかったり一緒に遊びたかったりする自分たちの気持ちをおさえ、元気に大きくなるのを願うとともに楽しみにしている。

ウサギの親子を保育室に おたより (2008/03/14 付) より

先週末から乳離れし始めた子ウサギが、体を寄せ合い餌を食べる仕草は見ているだけでほのほとします。今週からだっすることもできるようになり、好きなこどもたちが輪になって膝に乗せています。「かわいいなあ…」とこどもながらに目を細めています。あやすような声も聞こえてきますよ。それよりも、トイレのシート換えを上手にすることもいるのに感心します。チカコ先生がしてきたことをそばでずっと見てきているこどもたちです。頭が下がります。暖かな日差しの中、久しぶりに外にシロを連れ出していったこどもが、リカ「砂場でウンコしそうや」と、ウサギのお尻を上向きに抱いて慌てて保育室に連れて帰っていきました。「間に合ったわ」と、ウサギのケージの中にあるトイレでウンチが出たことをこんな風に表現していました。我が子を世話しているかのような言葉です。

5. つながる命との出会い

エピソード 20 子ウサギの行方

3月18日の修了式を前に、シロとクロや6羽の赤ちゃんウサギの世話をどうするのか話し合った。ミカ、リカやリノたちは「小学校に連れて行きたい」と言い出した。私たちは、自分たちで守っていける力を付けたこのこどもたちに託したいと願った。そこで、進学先の小学校との交渉を私たちがするのではなく、自分たちで進学先の先生に交渉するよにとの思いをもった。ミカたちに、「小学校に行って、先生が決まったら、その先生にみんなからウサギが飼いたいことを頼んでみたらどうかなあ」と提案した。それまでは、幼稚園で育てていくこと、赤ちゃんウサギは6羽共には育てられないと話し、1羽は幼稚園に残し5羽のもらい先を探すことにした。

ホームステイを体験していた家庭からの申し出や、何度となく親子で話し合いを重ねて諦めるこども（ショウ）もいた。自分は飼いたい父親を説得できなかったと諦めるのは、こどもばかりではなく、母親もそうだった。まず最初にシンの家庭へ、次にリカの家庭へ、次にタツヤの家庭へ、次にケイスケの家庭へ、そして最後の1羽は3歳児の家庭に引き取られていった。幼稚園に残ったウサギの名前は、クロとシロのこどもなので“ハイ”と名付けた。

修了式を前に一週間をかけて次に進級する4歳児に世話の仕方を伝えていった。そうして、2008年度からは、新5歳児がシロとクロの世話をするようになった。こどものハイは、今まで一緒にこどもと世話をしてきたチカコ先生が受け持つ3歳児で飼育が引き継がれた。



(1) シロとクロの死を迎えて ー小学生になってからの出来事ー

エピソード i シロの死 2008/5/4

2008年度がスタートしての5月の連休に、ウサギのホームステイが始まった。連休中、一本の電話が入っ

た。「先生すみません。シロが死んでしまって…」と、電話の向こうから話をする母親の泣き声が聞こえてきた。落ち着かれて事情を聞くと、自宅で飼っている犬と一緒に土手を喜ぶと思って走らせていたところ、急に元気がなくなって…すぐに犬のかかりつけの獣医さんに診てもらって「熱中症」とわかり、冷やして手当をしたけれどだめだったと、非常に責任を感じておられた。亡骸を園で受け取ることにした。休日のさなかで亡骸は、すぐに埋葬する必要から園舎敷地内の安全で静かな隅に埋めることにした。そのこどもの担任のマリコ先生と二人で「ごめんね」「暑かったやろうね」「ごめんね」「このくらいの深さでいいかなあ」「ちゃんと土に還ってね」といいながら穴を掘って埋葬した。

その話は連休が明けた6日に、5歳児のこどもには先生から、また、5歳児の保護者にも先生から責任を感じてひたすら申し訳ないとうつむいておられる保護者の気持ちを伝えるとともに引き続きホームステイはしていきたい考えを伝える場を設けた。

職員室でも朝にそのことを伝えた。「チカコ先生泣くだらうなあ…」と思っていたとおり、泣いてしまった。一生懸命こどもと育ててきた人だけにそのところが他の教職員にも痛いほど分かり、もらい泣きをしてしまった。

そのニュースは、在園児の家族から卒園児の家族へと流れた。ウサギを引き取って育てているシンと母が「シロが好きだったものです」と、ホームステイの時によく食べたニンジンとパセリを動物の慰霊碑の前に供えてお参りに来てくれた。その後も、同じくウサギを育てているリカやタツヤやケイスケも家に咲いている花を摘んでお参りに立ち寄ってくれた。彼らはお参りを済ますと、園庭の遊具で遊んだ。母親と私たちは立ち話でシロを偲んだ。一年生の間でもこどもたちからもそのニュースが広がり、帰りに立ち寄ってくれるこども（ミカ、カナ、シヨウ）がいた。

エピソード ii クロの死 2009/6/11

2009年度がスタートし、また、クロの世話は新たな5歳児へと引き継がれた。2階テラスの陰の場所に飼育サークルに囲まれた家があり、そこに暮らしていた。5月の連休には、こどもの家にホームステイに出かけたり、園で留守番をする日もあったりそのときには、保育者が世話にやっけてきた。そして、6月に入ってしばらくすると、出血が見られどこからのものか見定めつつ、帰りはテラスから保育室へ入れて食欲はあったので様子を見ることにした。しかし、その出血が止まらず、近郊の獣医に診てもらうことにした。その先生はウサギは専門外だと断った上で診てくださり薬を処方して3日間様子を見てくださると話された。そうして次の日は元気になったようで安心していましたが、3日目からやはり食べなくなり、もう一度診てもらおうかどうかと悩み診療時間に連れて行けず1日待つことになった。そのことが気がかりだったユカリ先生が少し朝早く出勤して保育室に入るとクロが亡くなっていた。目を開けたままだったので、「ごめんね」「一人で苦しかったやろうね」とユカリ先生が話しかけながら閉じてやろうとしても、硬直して閉じなかった。チカコ先生は傍で泣いていた。棺に見立てた箱に柔らかに布を敷いてそこに寝かせて花を添えてやった。登園してくるこどもにもその姿を看取ってもらった。こどもたちも自分の好きな花を園庭からとって入れてやった。クロは姿が見えないくらい花に埋もれていた。こどもが帰った後に、保育者でシロが眠っている近くに埋葬することにした。すると、掘っているときにシロの骨が出てきた。驚いたこともさることながら、ずっと世話をしてきたチカコ先生が、「よかった・・・シロが迎えに来てくれた」と涙した。こんな感覚がこの先生にあることを聞いてジーンとところに浸みると同時にこんな先生の感性と共に暮らしたこどもの幸せを感じた。亡くなったニュースは、在園児の保護者から当時のこどもや保護者にも伝わり、花を供えてお参りする家族が訪れた。

エピソード iii お参りに来る小学生

6月15日(月)クロが死んでしまったことを聞いて、小学校の帰り道にリカ・ミカ・タツヤ・ケイスケ(小2, リカ・タツヤ・ケイスケはクロのこどもを飼っている)がやってくる。保育者が「お参りに来てくれたの、ありがとう。病院でお薬もらってちょっと元気になってきたと思ってたんやけどねえ…」と病気の話をしながら動物の慰霊碑の前まで行く。ミカ「1匹死んだなあ、おんなじとこやなあ！」保育者「そやったなあ、最初に生まれた子が居るところやなあ」タツヤがランリュックからナイロン袋に入った餌を取り出す。保育者「ありがとう、ちょうどハイのお茶碗があるわ」と取りに行き、テラスで餌を入れ換える。タツヤが入れようとするがなかなか袋から出てこず、それを見ていたリカが「もう、私がやるわ！」と交代する。

みんなで慰霊碑の前に餌と持ってきた花を供え、手を合わせる。ミカ「(リカに向かって)あんた手紙持ってきたやん」リカ「ええ〜(少し照れくさそうに)」保育者「そうなん、読んであげて、クロも喜ぶわ」リカ「ええ〜(照れてだら一んとする)」ミカ「読みいな〜！」リカ「あんたが読みいな〜！」と言いながらもランリュックから手紙を出し、慰霊碑の前に向かい合う。ミカ・タツヤ・ケイスケ・保育者は少し後ろで聞いている。リカ「『クロちゃんへ シロちゃんもしんでしまってとうとうクロちゃんまでしんでしまいました。これまでありがとう』と読み上げ、慰霊碑に供える。リカの手紙を聞いて保育者「ほんまにいろいろありがとうやったなあ…」と今までのクロの姿を頭に思い浮かべながらつぶやく。ミカ「抱っこしてたら生まれたなあ！あれ、リノちゃんやったっけ？」とクロの出産を思い出した様子。保育者「ちゃうちゃう、ヨシカちゃんや、ヤマモトヨシカちゃん」ミカ「あ、そうか！あの〜、水に葉っぱ入れて固まるかな〜？ってやってたなあ」保育者「そうそう、クロとシロのおうち作ったとこでなあ！寒い時やったしなあ」ミカ「でも固まらへんかってん」保育者「そやったなあ」と思い出話をしながらハイのところ(東側テラス)へ向かう。その間、タツヤ、ケイスケは雲梯で遊ぶ。リカ・タツヤ・ケイスケは東側テラスのころころすべり台で遊び始め、ハイはそばの垣根のサザンカの下に寝そべっている。リカ「うちのミミちゃん(もらって飼育しているウサギ)、ぶっちゃい(太い?)ねん」と言いながら滑る。リカ「そやしお医者さん行ってる」ミカ「ほらほら、ハイ見てるで」リカ「どどここ?ほんまや！」タツヤ「ハイどこ？」保育者「そこ(指して)に寝てるよ」タツヤ「ほんまや」と覗きこみ、再びすべり台で遊び始める。



6月16日(火) ショウ(小2)が登校前に花を供えにくる。母親がクロを可愛がっていて、子ウサギも飼いたいと思っていたが、家の事情で飼えなかった。母親が花を持たせてくれる。

6月17日(水) 小学校の帰り道、シン・ユウダイ(小2)が小学校からの友だちを連れて、花を供えにやってくる。慰霊碑に花を供えると、雲梯で遊び帰っていく。

6月18日(木) 小学校の帰りに、シュウ・リコ・カオル(小1)が母親と一緒にお参りにくる。こどもたちは母親に促され慰霊碑の前で手を合わせる。母親とクロの病気の話をするが、こどもたちは「懐かし〜」とブランコに乗ったり雲梯をしたりして好きに遊び始める。

7月17日(金) シンタロウ・サナ(小1)と母親が花を供えにやってくる。慰霊碑の前でみんなで手を合わせる。こどもたちはジャングルジムや雲梯で遊び、母親とクロの病気やサナの母「こうやって見るとやっ

ぱり幼稚園って花が多くていいですね」と小学校に行き気づいたことの話をする。

(2) ハイへのおもい

エピソードiv 夏休みのホームステイを迎える前に 2009/7/19

シン(小2)の母から、ハイの毛を散髪しに来てくださる(2月14日生まれのウサギなので“チョコ”と名付けて育てている家族)。チョコを可愛がって育てておられ、毛が生え替わる時期にウサギの散髪をしてくれるところを探して連れて行かれたとのこと。そこで、何回か散髪をしてもらううちに自分でもできるようにマスターされたとのこと。専用ブラシを持って膝にハイを抱いてイチヨウの木陰で散髪をしてくださった。その間、チカコ先生が傍にいてハイの話やチョコの話が弾んでいた。



エピソードv 届くはがき 2008-2009

卒園したモエカ・タカオ・マヒロ・ナホ・ミカから届く季節の頼りには、「シロはげんきですか?」「クロはげんきですか?」「ハイはおおきくなりましたか?」と必ずウサギのことが尋ねてある。シロやクロの死を知らずにいるこどもには、その事実を伝えるとともに元気に暮らすハイの現況をデジタルカメラで写真を撮って写真付きのはがきで返事を書くことにしている。こどもとウサギを通したやりとりを重ねられることを幸せに思うと同時にウサギ物語を語り続けたいと願っている。

IV. 考 察

本稿では、ウサギの飼育を通してこども、保育者、保護者がともに生活を営んできたなかでの貴重な体験を、エピソードを通して「ウサギ物語」として語ってみた。

まず、そのなかでそれぞれのこどもにとって「ウサギ物語」から見えてきたものをいくつかの観点から述べてみたい。

1. ウサギとの生活のなかで

- ・家庭が不安定な時期にあったりノとカナにとっては、保育者と最初からウサギの世話をしたりウサギを抱いたりすることで寂しさや悲しみが癒される経験になった。
- ・「トシは、先生と一緒にやったら友だちと遊べるけど、ひとりやったら遊べへん」と、母親に漏らしていたトシヤが、ウサギが好きで工作が得意だったことからウサギのコース作り、アスレチック作り、砂場のトンネル作りへと遊びが広がるとともに、そこで出会う友だちと目的を同じにして協力するを経験していく。ウサギへの関わりは、自己中心的な関わりから、ウサギの視点に立って考え、ウサギのために作るモノを工夫するようになっていった。ウサギの出産と子育てに、「ずっとしててな、トシ疲れたわ」と、手作り布団を渡してくれた。雪の降った休日に作っている。そこには命をつなぐ思いが育まれていることがうかがえた。その行為は、次にユリアの心を動かし引き継がれた。

- ・砂場のトンネル作りでたまたま自分の掘った穴にウサギが入った時の「またケイちゃんのとこに入った！」の喜びが、子ウサギを引き取りたいと母親を説得するケイスケの力を生んだのだと考える。
- ・砂場で放し飼いにすることの衛生管理の問題は、他園の保育者から指摘を受けていた。しかし、リカがクロをいつもと違う仰向けの抱き方で「ウンコでそうやから」と、砂場から2階テラスにあるウサギのトイレまで慌てて連れて行けるぐらいに、その頃にはウサギの微妙な変化に気づくまでの身体的な感覚を身につけていた。

2. 遊びにおける二重性のなかで

- ・ウサギの世話をしているときには、ウサギはこどもにとって客体であるが、自分がウサギになって遊んでいるときは主体であり、そこに、あたかもウサギの身になる感覚を体験する。そのことは、他者に対する心の理解にも繋がっていく経験になると考える。
- ・ウサギになったときの自分は、いたずらや甘えと自由に感情を表出している。自分に戻ると、その感情は抑制され5歳児としての振る舞い方をする。その二重性を行き来することが逆に、うまく自己を振り返りコントロールする力を身につけるように思う。

3. 共にいる保育者の語り

- ・ウサギに心があるように保育者が『お水替えてくれはったよ、よかったなあ!』『ウサギもきっと喜んでいると思う』などと話しかけている。保育者は言葉を話さないウサギの思いを代弁するような関わりをすることが多くみられる。それは、人もウサギも同じ動物であり生きていることを伝え、教育要領に掲げている「…親しみや畏敬の念、生命を大切にす気持ち、公共心、探求心などが養われるように」との願いがあるからである。その語りがこどものウサギへの関わりの『2. 遊びにおける二重性の中で』で述べたような影響を与えていく。

ところで、ウサギの飼育をめぐる物語は、『1. 子ウサギとの出会い・飼育する環境を作る・そして、ウサギの名付け 2. ウサギとの遊び場を作る 3. “ウサギとの遊びの場を作る” その遊びの広がり 4. ウサギの出産と死のなかで 5. つながる命との出会い』といった展開をもつストーリーのなかに生き、体験したことは子どもの育ちにとって重要な意味があると考えられる。子ウサギとの出会い、自分たちの仲間となるウサギ、大きくなったウサギの出産、新たな命の誕生、親ウサギの死といった、命の生成・つながりをめぐる出来事（ストーリー）のなかで、こどもは、期待に弾む心、親しみ、愛着、驚き、慈しみ、喜び、心配、不安、悲しみといった様々な感情のうねりや情緒的な体験を豊かにしている様子が、エピソードからもうかがい知ることができる。そのような情緒的な体験は、「心情・意欲・態度」を育む幼児教育にとって大切になることはいままでのない。それだけではない。この「ウサギ物語」のなかで、ウサギは耳が細い、ふわふわしている、どんな食べ物を食べるか、どんなウンチをするか、抱くと（心臓が）ドキドキしている、出産前には普通と違う様子や鳴き声をしている、どんな風に赤ちゃんが生まれるか、やがて死ぬ、といった一連の体験を通して、生命に関する認識も深まって

いく様子もうかがえる。

考えてみると、そのような豊かな幼児期の情緒的な体験こそが、じつは他方で「なぜ?」「どうして?」「どのように?」「どうすれば?」といった問いや工夫を引き出す契機となってくるように思われる。まさに、それは科学する心を培っていく基盤となるものではないだろうか。

V. おわりに

はじめに掲げた問題意識から、実践を振り返ることを試みた。すなわち、ウサギの飼育に関わった子ども・保育者・保護者たちの有り様について、①ウサギとの出会いを時系列に沿ってエピソード記録を収集する②そのエピソードを幼稚園教育要領の5領域から読みとく③さらに、子ども・保育者・保護者が味わった感情体験がどのように行動や言葉に表れているのかという点から観ていくことであった。①②については、省みることができたが、ウサギ物語の生成過程を丁寧に本稿では語るにとどめている。③についての分析については、先行研究の示唆に学び深めていきたいと考えている。

なお、本稿の特徴は、ウサギとの出会いを時系列に沿ってエピソード記録を収集してきたことをウサギ物語として語ることを試みたことから、幼稚園の教育課程、保育計画の中でどのように展開されたのかが分かるように、当園の教育課程（育ちの過程をV期に分けて設定）の中にウサギの飼育の具体的な位置づけやその時期のこどもの姿の特徴や遊びを付表に示した。

付 表

教育課程及び保育計画にあるウサギの飼育 2007年度5歳児

期	ねらい	子どもの姿・遊び（生活）	エピソード
前 安 定期	I 期	○新しい環境に関心をもつ、気の合う友だちと一緒に遊ぶ ○年長児になった喜びと自信 ○自分のしたい遊びを十分に	・依存的、ねじれた仲間関係は意図的に2学級編成で分ける自由形態の遊びでは学級枠を超え、親しい仲間関係で安定 ・進級し飼育当番開始、飼育物（ウコッケイ）への興味、関心が高まる
	II 期	○自分なりの考え、力一杯取り組む ○友だちとつながる、共通の目的をもつ ○身近な事象に触れ、よく見たり考えたり工夫したりする	・意図的グループで当番活動や生活を共にしつつ、もめながらも自己を調整し協力して事を進める喜びを味わう
安 定期	III 期	○戸外で体を十分に動かす、友だちと一緒に考えたり工夫したりする ○課題をもち、自分の力でやり遂げる喜び ○身の回りの事象に関心をもつ	・園舎耐震工事に伴い、プレハブ園舎での生活開始 ・K幼稚園からウサギ誕生のニュース、相談しウサギをもらいに出かけ、皆で引継ぎながら子ウサギを連れ帰る ・ウサギ部屋の中でウサギとこどもの生活、遊び場作りや、名前募集。好きな友だち関係とは違う顔ぶれが集う ・自己中心的なかかわりから、ウサギの立場に立った表現へ
	IV 期	○友だちとのつながりを深め、共通の目的をもつ、役割分担 ○自然の変化に気づき、生活に取り入れる ○思ったこと考えたことをいろいろな方法で表現	・ハロウィンでの生活の中にウサギレストラン、ウサギのおばけ。積極的に遊び空間をもちながら他の遊びのこどもとも広がる ・歌「ウサギ野原のクリスマス」より、サンタへウサギの手紙代筆 ・耐震工事終了、園舎引越し。さくら組保育室前テラスにウサギの家。ウサギを家族の一員として家族ごっこ

1～11-①

11-②～13

		<ul style="list-style-type: none"> ・ K 幼稚園へウサギの里帰り。ウサギを大切に思う園外の人 の存在 ・ 冬休みのウサギのホームステイ。家庭との連携
充 実 期 V 期	<ul style="list-style-type: none"> ○課題をもち、それに向かって活動を展開 ○自分のもてる力を友だちと協力して創り出したり考えたり表現する楽しさ ○成長の自覚、入学する喜びと期待 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本「ウサギ」からウサギを気遣う声が出てくる。園庭でウサギの家づくり、それを基地に遊びが広がる ・ 砂場でウサギの遊び場作り。その様子を見て様々な友だちが集い、力を合わせ、役割分担しながら道作り。ウサギとこどもが共存 ・ こどもの手の中で赤ちゃんウサギ誕生。ケーキ作りやウサギの親子を気遣った看板や、母との毛布作り ・ “こども劇場”の中でウサギになりながら出産の場面を再現 ・ 継続する中での飼育の充実、我が子を世話するような表現 ・ 就学に向かい小学校に連れて行きたい思い、赤ちゃんウサギの引き取り

引用・参考文献

- 岩田純一. 2001. 「〈わたし〉の発達」 ミネルヴァ書房.
- 岩田純一. 2005. 「子どもはどのようにして〈自分〉を発見するのか」 フレーベル館.
- 岡本夏木. 2005. 「幼児期」 岩波新書.
- 中川美穂子. 2007. 「〈相手の感情と身体〉を理解する脳をつくる」 文部科学時報 pp.51-55.
- 中川美穂子. 2007. 「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 4:53-65.
- 幼稚園教育要領. 2009. 文部科学省.

付記

本実践論文は、2009年度ソニー幼児教育支援プログラム「科学するところを育てる」に応募した原稿をもとにして、加筆修正したものである。